

相双地区（福島-B）における地域精神保健医療福祉システムの 再構築に向けた支援者支援に関する報告

研究分担者 三品桂子¹⁾

研究協力者（主執筆者に○）○高木俊介²⁾ 米倉一磨³⁾ 須藤康宏⁴⁾ 上久保真理子⁵⁾
横山香理⁵⁾

- 1) 花園大学 社会福祉学部 臨床心理学科
- 2) 医療法人 光樹会 たかぎクリニック
- 3) 相馬広域こころのケアセンターなごみ
- 4) 医療法人社団 メンタルクリニックなごみ
- 5) 医療法人社団 互啓会 ぴあクリニック

要旨

東日本大震災による被災の中でも福島県相双地区（福島-B）においては、福島第一原子力発電所の事故によって精神科医療保健福祉サービスが壊滅状態となった。「NPO法人相双に新しい精神科医療保健福祉システムをつくる会」によって2012年から相馬広域こころのケアセンターなごみ（以下、なごみ）が開設され、ついでメンタルクリニックなごみが開設された。本年度には、さらに訪問看護ステーション、そして近々相談支援事業所も開設され、なごみグループは相双地区の精神保健福祉の基幹的な役割を担うものに成長している。今年度の支援活動は、①豊富となった各機関の連携のためにチームを統率するリーダーを育成する、②なごみの活動、とりわけアウトリーチに対するスーパービジョンを前年度に続き同じスーパーバイザー（コンサルタント）を継続的に派遣し、現地のニーズにそった助言・指導・学習を行う（さらにその際ピアスタッフを同行して、のぞみの当事者活動とのつながりをつくった）、③外部への広報活動として当地区において次第に顕在化しつつあるアルコール関連問題の啓発・教育のために講演会を行う、等の活動を行った。その結果、現地チームスタッフの経験、スキルが向上し、ミーティングの質も高まった。被災から丸4年が経過するが、その間に問題は山積するばかりか、新たな問題が次々に生じてきているという状況である。本研究は3年間で終了するが、その成果を継続するための方策が、本研究全体の課題として残されている。

A. 研究地区の背景

2011（平成23）年3月11日の東日本大地震により発生した福島第一原子力発電所の炉心融解は長期的かつ壊滅的な打撃を及ぼし、住民の多くがその後わたって長期的な避難を余儀なくされた。さらには帰還の目途も立てることができない福島B地区にとって、衣食住という肉体的

な安全を確保することにすら満足な復興をとげることはいまだに困難である。

この地区に対するメンタル面での支援については、福島県立医科大学こころのケアチームが震災直後より発足して相馬市を中心とした支援を進めてきた。その成果として2011年11月にNPO法人相双に新しい精神科医療保健福祉シス

テムをつくる会が設立された。その会設立によって、2012年1月10日に相馬市、南相馬市を対象地区とした、相馬広域こころのケアセンターなごみ（以下、なごみ）が開設され、被災者の支援や障害者の支援をおこなってきた。

また、同時に精神監護法の制定の発端となった相馬事件以来、精神科医療機関が開設されることはなかった相馬市において、メンタルクリニックなごみが開設された。開設から、わずか2年の間で、急速にアルコール関連問題も含めて震災PTSDが絡み合っていると考えられるメンタル上の諸問題が表面化し、治療が必要と判断されるケースが増え、その診療機能も拡大の必要性が迫られるようになっている。

その拡大の一環として、本年度4月より訪問看護ステーションが開設され、なごみの活動はさらに広範化しており、諸機関の連携が課題として挙げられたため、今年度の支援はそれに焦点を当てている。

B. 支援活動の実施における準備

相双地区のメンタルヘルスの状況について、現場であるなごみによってまとめられた状況は、図1、図2に示す如くである。

また現在の課題として、

- 1) 急遽、立ち上げを強いられた苦勞、使命感の重圧から地域に生活する住民の一人ひとりの復興支援を継続する困難性に直面化している。
 - 2) 全国の先進的な取り組みを理想とし優先とした考えから、地域に根差したチームへと考えに転換してきている。
 - 3) 多職種チームを効果的に展開するためには、事例検討会やミーティングのあり方を検討し、苦勞や価値観を共有する場へ発展させていく必要がある。
- という3点を挙げている。

昨年度末に行われたなごみにおける研究班によるフォーカスグループ・インタビューでは、

なごみ側のからみた昨年度の活動のまとめとして以下の点が挙げられた。

a) 休養について：

事務仕事の増大に対して増員し余裕ができ、意識して休むようにしている。

b) 訪問看護ステーション設立について：

2年目となり、見学した各地域の訪問看護ステーションの工夫や苦勞が見えてきた。

c) 外部支援者によるスーパービジョン（コンサルテーション）：

なごみのほうからスーパーバイザーの指定があり、同一人物による連続したスーパーバイズ（コンサルテーション）を受けることができ、課題であったミーティングの質が向上した。利用者のグループ活動について、当事者視点が依然不足しているという指摘があった。

d) 事務、支援の分化：

活動を南相馬市にシフトする方向で活動を見直した。南相馬市では、子どものケアのニーズが多いが、それに対応する機関がなく、なごみの支援事業として位置づけられる。

e) サービスのあり方：

地域のニーズとしては、高齢者の在宅生活支援、重い精神障害を持つ人の地域生活支援、被災住民や仮設住宅で行う保健活動、ひきこもり、未治療ケースへのアウトリーチも引き続き行うニーズがある。家族支援、アルコール問題も課題である。

C. 現在構築されている支援体制

上記の知見、反省から得られた今年度の各支援活動の実施結果について報告する。

1) 「アウトリーチの技を探求する会」開催

日時：2014年9月14日

場所：郡山ユラックス熱海コンベンションホール
なごみより関係者9名、京都より高木が参加

この会は、今回の研究事業でアウトリーチによる支援を行っている各地のグループの交流と親睦を深めるために企画された。

地元で常に緊迫した課題に向き合い続けているスタッフの慰労も兼ねて、肩の凝らない、日ごろの思いを吐き出すことのできるやり方を心がけ、アウトリーチの中で日々起きている、日常的な思いつきや偶発事、その意外な結果をとりあげて、各地チームが自分たちのチームの特色を「自慢する」かたちで自分たちのやり方を客観視し深めることを目指した。

これは結果として、なごみなど震災後に支援のチームを立ち上げたところが互いに交流を育てていくことにつながる試みとなった。

- ・「アウトリーチの技は、事業所独自の取り組みの地域性や独自性、文化が感じられた」、
 - ・「アウトリーチの技については、個別的な意味を考えて支援することの必要性を学んだ」、
 - ・「アウトリーチの技については、アセスメントを言語化する力が必要なことを学んだ」
- 等の感想、意見が寄せられ、次年度への継続が他のサイトからの参加者からも望まれた。

2) リーダー研修会

日時：2014年12月8日～12月12日

なごみより米倉氏1名が参加。

研修目的：

- ①チームミーティングを見て、スタッフ間の意思統一の方法を学ぶ。
- ②どのようにして多職種チームの機能が維持されているのかを学ぶ。

訪問看護ステーション不動平ぼっけの訪問看護同行および、ぴあクリニックの訪問看護同行を行った。ACTの支援内容等の説明を受け、重症な精神障害者が生活支援を主体とする訪問看護を受けながら、日中居場所の場の「虹の家」への参加などを通して、人と場を拡大させていること、往診によって地域の引きこもり事例を支援に結びつけるなど、地域の精神医療保健の行き届きにくいところへの支援を行っていることを理解した。

スタッフがミーティングで自分の思いをなんでも言い合える場にするための配慮をしており、

成熟したチームであるという印象を受けた。

職種がどうかということではなく、対人間の支援者として支援の方向性をチェックしやすい雰囲気が出ており、リーダーの役割を考えるうえで参考になった。

3) なごみの活動に対するスーパービジョン（コンサルテーション）

今年度の事業においても中核に位置づけられる活動である。報告書作成時点ではまだ活動が完了していない。以下はスーパーバイザー（コンサルタント）として3回（予定）の訪問を行った上久保氏と同行したピアスタッフ横山氏の報告をもとにまとめる。

【第1回】スーパービジョン(コンサルテーション)

日時：2014年11月17日～18日

全体印象：笑顔、発言が増え、他メンバーに対する信頼を背景に、訪問等の日々の業務を行えるようになったと感じられた。実践の蓄積も増えて「この方向で良いのだ」という手応えも感じつつあるようだ。訪問看護ステーション立ち上げにあたって京都のACT-Kに勤務していた伊東看護師がいることもチームの安心感につながっている。

（この件はかつての同僚として本報告執筆者にとって嬉しい知らせである。）

朝ミーティング：笑顔は増えたものの、単なる申し送り、必要最小限の報告だけになっており、危機的状況にある人へのかかわりを相談できる場とすることも含めて改善が必要。

その他：南相馬事務所において、子どもの問題など女性スタッフの必要性が増していることが感じ取られた。

【第2回】スーパービジョン(コンサルテーション)

日時：2015年1月26日～27日

ミーティング中の発言：

質・量ともに充実していた。訪問先で感じたこと、支援の様子があまくまとめられ、戸惑いや疑問も出されるようになった。多職種による支援が機能するための基礎ができつつある。

課題としては、訪問看護ステーション、ケアセン

ターなどでそれぞれ訪問対象者が異なり、活動内容も違う中で、チーム全体で共有すべきこと、朝ミーティングで行うべきことを整理していくことが望まれる。

同行訪問のスーパーバイズ(コンサルテーション)：

【ケース 1】「批判」、「敵意」、「過度の情緒的巻き込まれ」という高 EE 家族で、当事者の精神状態が悪化する。このような家族の存在は相馬地区固有のものではないが、相馬地区には震災以前に精神障害者支援の体制がなかった点を鑑みると、家族支援体制の構築が今後の課題である。

【ケース 2】南相馬のケース。不登校の中学生。本人と同居のキーパーソンが統合失調症という困難なケース。原発事故の影響が非常に色濃く影を落としている。ただでさえ、大きな問題を抱えた地域で困難なケースに向きあい続けることは、支援者に大きな精神的な負担となる。個々の支援者に対して定期的・継続的なスーパーバイズが必要である。

相馬、南相馬双方ともに、訪問に同行し、個々のケースの抱えている問題が鮮明化してきた。原発避難の継続に伴うケースの深刻化も一要因と考えられるが、それ以上に、訪問スタッフのケースを把握する力が向上したことが要因であろう。

【第 3 回】は、2015 年 2 月中旬に予定である。

●ぴあクリニックピアスタッフ横山氏報告：

【1 日目】「なごみ Club」の当事者と活動に参加。麻雀とカラオケの活動のうち、後者に参加し、その後の当事者の方の送迎に同行した。仮設住宅に住んでいる女性を訪問。仮設の不便さとサポートが受けられる利便の中での迷いを聞く。「なごみ Club」では担当スタッフが多く、配慮がいきわたっていたが、スタッフが多い分、当事者の自主的な活動が少ないと感じた。

【2 日目】南相馬の事務所に行き、被災地をまわった。まだまだ復興しているとはいえ、除染作業や壊れた堤防、人が暮らしていない家や店や病院を見て今の福島の実情を知った。事例検討会で

は、自分の当事者研究を発表。自分らしい発表ができ、何か 1 つでも南相馬の当事者の人たちの心に残ってもらえればと思った。

●スーパービジョン(コンサルテーション)を受けたなごみの感想：

最大の成果は、ミーティングの改善、および既にピアクリニックが行っている当事者主体の考え方が浸透したことである。ぴあクリニックのチームが成長する過程を知り、現在のなごみのスタッフの苦悩が次のステップに進むための段階であるあることを客観的に理解した。また、地域特性によって取り組みの違いがあり、必ずしも一つの答えではないと感じた。

ピアスタッフの横山氏との交流で、なごみが行なっている日中活動の場「なごみ Club」を当事者主体とするためのヒントを得た。

この 3 年間に渡って、支援を受けて学ぶ中、地域支援チームの成長について、当法人の歩んだ道や受けた支援は、今後、わが国の精神科医療が地域へ移行していくにあたり、一つのモデルケースとなるだろうと思われ、何らかの形で継続が望まれる。

4) 外部への広報活動

日本精神障害者リハビリテーション学会 第 22 回 いわて大会(日時：2014 年 10 月 30 日～11 月 1 日) 自主プログラム 24：「被災地における支援者支援のメリットとデメリット、これらに向けて：現地支援者からの発信」にて、本事業のまとめとして発表を行った。

内容としては、福島 B サイトは、震災を機に新たに始められた、包括的なケアやアウトリーチを主体とする支援活動を行う組織として立ち上がった活動事業体の支援を行っている。これらの活動事業体においては、支援技法に関する研修やアドバイスを必要としている現状の中、外部支援者による定期的なコンサルテーションが現地支援者の心理的なサポートやチーム形成の一助、あるいは、自分たちの活動を整理するための一助と

して機能していることが確認された。

また、福岡で開催された 第 6 回 ACT 全国研修 福岡大会（日時：2014 年 11 月 8 日～9 日、場所：九州産業大学）に、地域での活動を始めて間もないスタッフ（訪問看護ステーション職員）が参加し、ACT の訪問活動の実際を知り、既に ACT を学んだ他スタッフとの目標を共有することができた。

5) アルコール問題など地域の支援ニーズに対する研修

日時：2015 年 2 月 7 日

場所：南相馬市 道の駅 観光交流館ホール

テーマ：「アルコール依存症と家族」

演者：野田哲朗 医師

（大阪府立精神医療センター 医務局長）

現地で実際にこの問題に接して悩みを抱えている消防職員を含めて、広く精神医療保健福祉関係者の約 40 名の参加を得た。

研修内容：

- ①アルコール関連問題の現状、
 - ②アルコール依存症の理解、
 - ③コミュニケーションツールを活用した関わり方、
 - ④家族とアルコール依存症、
- について、広範囲にわたる対象者に配慮した講義内容であった。

相双地区では、原発近くの双葉地域で断酒会が行われていたが、福島第一原発事故により断酒会の活動が不可能となり、現在でも南相馬市での断酒会再開はあるものの地域ぐるみの活動とはなっていない。

長引く避難生活、この地域のアルコールの寛容的な風土もあり、地域の関係機関が地域で起こる問題に困惑している。いわば、精神科医療に依存していた問題が支えきれず、保健、福祉の関係機関が手をこまねいているもっとも困難な問題がアルコール関連問題である。

なごみでは、県より委託された相双アルコールプロジェクトを展開し断酒会の相馬地域の設立支援、関係機関の研修会など保健医療の関係者を

巻き込んだネットワークを構築してきた。

今回の研修会は、関西の先進的な取り組みを被災地に発信することによって、本来必要とされる支援体制を構築する一助となった。支援者支援の役割として、支援者のアルコール関連問題の対応能力の強化、疾患の理解の共通認識が必要であり今回の講演会は、きっかけを促す一歩になったといえる。

なお、講演者の野田医師も翌日帰還困難地区などを見学してまわり、相双地区の被災状況の大変さと復興の困難さを知り、今後もなごみの活動に協力を惜しまないと言っていることも、今回の成果として附記しておく。

6) 2015 年 2 月 4 日～6 日に、2 名のスタッフが相談支援事業所の見学・研修を行った。

D. 今後の課題と考察

この 3 年間の福島 B 地区の支援の総括の前提として、津波と震災の被害と原発事故という人災を同時に受け、壊滅的と言っても言いすぎではないこの地区の状況の中で、そこにとどまり新たに地域の精神保健福祉システムを創造していこうと意志している、ほとんどが若い人たちが中心となって現在のシステムを作り上げたことに対して、最大の敬意を払わなくてはならないことを確認しておきたい。

その上で、あえて総括を述べるなら、3 年間にしてようやくこれから支援すべき課題が出そろった、つまりスタート時点に立ったというべきであろう。

まず、何もかも失われたところから始めて、過酷な状況の中でライフワークバランスを計りながら自らのメンタルヘルスを保ち、「アウトリーチの技を探求する会」のように、他の地域との結びつきと相互理解をユーモアをも添えながら行えたことは、今後の自身の支えになるだろう。ともすれば蝸壺的に自らの地域に閉じこもったやり方を、このような会を継続させることで外部に

開いてほしい。

さらに、これを発展させて、震災対応チームである宮城・岩手のチームとの連携、東北全体のアウトリーチチームとの連携をいっそう強化することも必要であろう。例えば、ACT チームにおける ACT 全国ネットワークのような恒常的で発展的なネットワークをつくること、外部の評価やピアレビューなどで自分たちの支援を見直す機会をつくることが望まれる。

また、相双地区の共同体的な特性から、今後は家族支援という視点を強化することが必要であろう。アルコールの問題やさまざまなメンタルヘルスの問題の中には家族支援によって、一定程度、解決や状態の改善が見込まれる。さらに、児童・高齢者などどの領域でも、家族支援のスキルは不可欠である。

これから、なごみも相談支援事業所が開設される。震災を経験した地域でのケアマネジメントの特殊性と一般性について明らかにしていくことも、現場にあった支援のために必要となる。例えば、そのテーマで講師を招き、チーム全員で家族支援やケアマネジメントについて学ぶ機会を設けることで、チームでのスキルと理解の共有、チームの一体性などを図ることができる。

今年度で当研究費は終了する。確かに、さまざまな問題点を明らかにし、自覚的になることができ、スーパービジョンなどの本事業がチームの成長に寄与し、スタッフの経験の蓄積を助けてきたと思われる。

しかし、原発事故による深刻なケースのさらなる深刻化、困難なケースにあたるスタッフの疲労などを考えると、外部からによる支援者支援の継続の必要性は明らかである。事例検討会でのアドバイザーやスーパーバイザーなど、間接的にチーム、スタッフを支援する体制が望まれる。そのため資金をどう獲得するか、これは本研究全体に問いかねられるべき課題である。

E. 結論

前回、前々回の支援時に比べて、さらに相双地区の精神保健福祉システムの基幹であるなごみに大きな役割が求められている。この3年間で、なごみのスタッフは確実に多彩な経験とスキルを獲得してきている。

また、前年の課題であったミーティングの質もある程度向上が認められる等、いくつかの課題がクリアされつつある。しかし、相双地区に課せられた問題の大きさに比べ、3年という時間はあまりに短く、課題は山積しているところか、今現在も次々に生まれている状況である。例えば、潜在していたアルコール関連問題、家族の支えを失って放置されてきた子どもの問題などが今になって顕在化しつつある。

それらに現在のシステムがどう対応し、それを外部支援者がどのように協力していくかということが、これからはじまるべき本来の中長期支援の課題であろう。

F. 健康危険情報 特になし

G. 研究発表

1. 論文発表 なし
2. 学会発表
 - 1) 上久保真理子, 高木俊介, 三品桂子, 他 (2014) : 同じ仲間として異なる地域の者ができることー被災地多職種アウトリーチへのコンサルティング活動. 第22回 日本精神障害者リハビリテーション学会, 盛岡市, 2014.10.30-11.1.

H. 知的所有権の所得状況 特になし

図 1



図 2

